

大平喜信衆議院議員が語る

日本共産党を伸ばしてこそ 国民の声が届く政治に

6月12日、広島県広島市西区南観音で、大平喜信衆議院議員を招いての「がんばろう会」が党後援会主催で開かれました。その中で大平議員が日本共産党が伸びると政治がどう変わるかについて述べた部分の要旨を紹介します。参考にしてください。

質問回数大幅増で存在感大—安倍暴走ストップ・国民の要求実現の力に

(2013年の参院選以降の共産党の)躍進が本当に国会の景色を変えつつあります。なんととっても国民の声が届く国会に変わり始めています。象徴的な数字の話ですけども、参議院は6議席から11議席になったことで、参議院議員が全員参加する本会議の場での共産党の登壇回数は、躍進前の1国会たったの3回から、去年の通常国会はなんと33回の登壇回数を数えました。11倍化しました。衆議院では、新人議員の僕でもこの1年半で31回質問したんです。全員数えたわけではないですけど、単純計算しても、衆議院議員が21人になって、1年半の2国会で600回、参議院の11人合わせれば900回。およそ1000回は僕は超えているんじゃないかと思います。共産党の1回1回の質問というのは国民の声を聴き、それをぶつけるものです。1000回を超えるような共産党の質問をしたということは、国会が開かれているときは毎日2回、3回と共産党の議員がとにかくいろんな委員会や本会議で質問をするということが当たり前の景色になるという状況でした。カラスが鳴かない日はあっても、国会が開かれているときに共産党が質問しない日はない。赤旗日刊紙をみなさんお読みになられたらよく実感されたかと思います。国会質問が載らない日はなかったですよ。もう追いかけれないくらい、それでも載せられない質問があるくらい。この躍進をさせていただいた、14議席から32議席にさせていただいたその力は、そういう規模で国民の声を届ける国会へと前進をさせることができました。

その力は、この間野党共闘という話をしていますけども、政治を大きく動かす力になった、市民、主権者、国民のたたかいや世論と運動が、この躍進した共産党国会議員団の論戦の奮闘と相まって、政治を前に動かしてきたというふうに思います。安倍政権の暴走をストップさせる力、市民のみなさんの切実な願いを本格的に実現していく力になってきたと感じています。

今国会の最大の争点はTPPの問題でした。私たち共産党の反対も押し切って、政府・与党は特別委員会を設置して、なんとしても今国会中に通すんだと言ってきましたが、日本の農業と地域経済を破壊するTPPは断固反対だというみなさんのたたかいに包囲され、今国会での成立は断念に追い込みました。沖縄の新基地建設の問題、先日県議選があつて、共産党も前進をさせていただきましたけども、オール沖縄の世論に包囲されて、なかなか止まらないと言われてきた新基地建設工事を中止に追い込むことにもなっている。あるいは、僕は憲法審査会に所属していますが、安倍首相は今国会冒頭から盛んに私の在任中に憲法改正を成し遂げたい、そのために憲法審査会を開いて議論をどんどんやってほしいと言っていました。あれだけ憲法改正に躍起になっている一方で、しかし衆議院の憲法審査会は今国会一度も開かれなまま幕を閉じたんですね。本当は与党は開きたかった。憲法審査会の委員のうち7割以上が自公の委員ですから、開くんだと言えば開けたんですけども、やっぱり昨年来の戦争法反対のたたかい、憲法守れという世論に包囲をされて、開きたくても開けなかった。全国各地から、あるいは広島や観音でも集められた、戦争法止めの2000万署名の一筆一筆のこの力が、集会一回一回成功のその力が、彼らの暴走をくい止めた。国会議員団の論戦と相重なって、政治を動かす力になってまいりました。

いいことは言うが力がないと言われてきた共産党でしたが、この2回の国政選挙の躍進で、いいことも言うし、なんだか力も影響力も持ってきたし、これは無視できないと他の政党も感じるようになってきた。国民の野党は共闘して頑張れという声に押されて、野党第一党の民進党も、

市民の声は聞かないといけない、そして影響力を持ってきた共産党の言うことも聞かないといけない、そんな力関係にもなっていて、この間の野党共闘の前進につながっていると私は思います。

安倍政権と正面から対決する力をもつのが共産党

もう一つ、安倍政権の暴走に、確かな足場をもって正面对決し、希望ある対案を示すことができる共産党が伸びてこそ、国民の声が届く国会に変えていけるんだということも実感しています。

今国会、僕は一番最後に外務委員会で質問しました。普段僕は文部科学委員会に所属していますが、その日だけ差し替えてもらって、この質問だけはどうしてもしないといけないということで、岸田外務大臣と論戦をしました。どういう問題をしたかという、去年の3月、山口県岩国の米軍基地から発進したであろう、であろうという話なんですけども、米軍機であろうジェット戦闘機が、島根県の川本町、邑南町を100デシベルを超える爆音を響かせながら低空飛行訓練をしました。100デシベルを超える爆音なんていうのは、まともに生活が送れない規模のうるささなんです。牛さんのお乳がショックででなくなる、園児が泣き叫ぶ。もううるさいっていうレベルではなくて、恐怖のレベルです。こんなとんでもない爆音の事件が去年の3月にありました。これを(県から照会のあった防衛省が)米軍に問い合わせてみますと、米軍からは米軍機ではありませんという回答だったんです。100デシベルを超える爆音の正体は米軍機ではありません。それを聞いた防衛省は、なんの疑いもなくそのまま島根県、そして川本町、邑南町に米軍機ではありませんでした、それではさようならというふうに返したんです。許せない。じゃあさようならじゃないよということで、これはなんとしても取り上げてくれという話になって、岸田大臣と防衛省に聞きました。米軍機ではないなら、では自衛隊機がこの日この時間この場所を飛んだという記録はありますかと聞いたら、ありませんと答える。ではどこかよその国の、外国の戦闘機がこの日領空侵犯をして、この地域を飛んだのですかと聞いたら、それもありますでしたと答える。米軍機も自衛隊機も他の国の戦闘機も飛んでいないとなると、100デシベルを超える爆音というのは住民のみなさんの空耳だった、何も飛んでいなかったという選択肢しか残っていませんがどうですかと、本当に国会質問で聞いたんです。そしたら、防衛省の担当者が、何かは飛んだらしいですと答えた。これ公式の国会答弁ですよ。何かは飛んだらしいけど何かはわかりませんというのが、防衛省の担当者の公式答弁でした。100デシベルを超える、もううるさいなんていうレベルではない、こんな人権を侵害するような、健康を破壊するような爆音被害を与えながら、米軍が白だと言えば黒いものも白くなり、日本政府は思考停止になり、行動停止になって、むしろ住民を説得するような、文字通りアメリカいなるの日本政府の姿勢を痛感したものでした。そんな安倍政権が、昨年戦争法を強行したんです。安倍政権は集団的自衛権の行使にしろ、戦闘地域に言っただけの米軍の後方支援にしろ、何をするかは日本が自主的に判断するから任せてください、大丈夫ですと言いつづけてきました。誰が自主的に判断できるのか。こんなことも解決できない日本政府が、この数日中国の潜水艦が接続水域に入ったということで、もちろんこれ大問題で、私たちが抗議もしましたけど、一方でそういうことについてはあれだけ監視だと言っていて、しかし米軍機に対しては知りません。こんなことでは、アメリカ軍と戦場に行っただけ、危ないから自衛隊だけ帰ってきなさいなんていうことができるはずがないじゃないか。こんな危険なことはない。アメリカいなるの日本政府を根本から転換して、日本人、自衛隊の命を守り、日本の安全と平和を守っていく政府、政権に大転換していかないとけないといけないということを共産党としては言いながら、他の野党のみなさんと力を合わせながら頑張っていきたいと思っています。

外務委員会のこぼれ話で、初めて僕は参加したんですけど、この日は全体で2時間半くらいの質問時間で、僕の前は民進党が3人か4人くらい質問したんですけど、委員の人たちみんな、船を漕ぐというんでしょうか、居眠りを8割くらいの方がしているんですね。民進党は、安保・外交問題、特に足場がない分野です。ですから、質問も、一人20分とかあるけども、2、3問しかしない、あとはずっと演説している感じなんです。それで僕が日本共産党の大平ですなんて言うと、なんだなんだという雰囲気になるんですね。つまり、野党共闘を前進・成功させて、自公与党を少数派に追い込んで安倍政権を退陣させるんだけど、それと同時に、確かな足場をもって対決する日本共産党がセットで大きくならないと、ひっくり返しても、本当に国民の声を届け、その切実な願いを実現していく国会に本格的に前進していくことにはやっぱりならないんじゃないかなということ、そんな体験を通じて実感をしているところです。

以上